

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	16H06324	研究期間	平成28(2016)年度 ～令和2(2020)年度
研究課題名	集合行動の認知・神経・生態学的 基盤の解明	研究代表者 (所属・職) (令和5年3月現在)	亀田 達也 (東京大学・大学院人文社会系 研究科(文学部)・教授)

【令和元(2019)年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A 当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
(意見等)	
<p>本研究は、集合行動の生起メカニズムを、社会科学、動物行動学、脳科学、数理生物学等の先端的な研究連携により、実証科学的に解明することを目的としている。具体的に設定された4つのテーマを通じて、集合行動という古典的テーマを、集合知の問題を含めて新たな学際学術領域として着実に展開し、成果を上げている。その研究成果は、査読付きの国際雑誌を多数含み、一般書を含めて多くの受賞歴も認められ、当初の目的の達成が十分に見込まれる。今後はさらに、局所的な相互作用がマクロレベルで意図せざる結果を生み出す仕組みの新たな視点からの理論モデル、そしてそれによる集合行動ないし集合知に関わる現実問題の説明が、4つのテーマの研究成果を更に融合する形で示されることを期待する。</p>	

【令和5(2023)年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、期待どおりの成果があった。
A	<p>本研究の目標は、種間比較実験、人を対象とする認知・行動実験、人を対象とする神経・生理実験及び数理モデルとコンピュータ・シミュレーションによる理論的解析という4つの方法を用いて、「集合知」成立の条件を明らかにすることである。フランスなどの研究機関とも連携して、国際的に評価の高い査読誌も含めて多くの論文を発表している。また、新型コロナウイルス感染症のまん延によって、対面でのヒト集団実験ができなくなったが、インターネットを用いた相互作用実験に切り替えるなど、突発的な事態にも工夫して対処をし、対面では不可能な大規模相互作用実験を行うなど、ピンチをチャンスに変えて優れた研究成果を上げている。</p> <p>一方で、人の集合行動の研究については、生物科学的視点が従来から欠けており、社会科学と生物科学を組み合わせることで集合行動を理解することが本研究の目的の一つだが、種間比較実験がどのようにこの課題の克服につながるかは、研究進捗評価（検証）報告書では必ずしも明示されていない。今後の成果発表で、計画全体の成果がより明らかになることを期待する。</p>